学校便り７月号　　令和４年６月３０日発行

なかまだみんな

横浜市立中和田南小学校
電話　８０２－０９７９

心の根っこ

副校長　丸山　浩司

中学１年生の夏休みのことです。わたしが入っていたバスケットボール部の最初の試合での出来事です。相手チームとは、シュートを入れられたら入れ返すというシーソーゲームでした。後半に入ってからは、お互いにエースの４番を中心にますますデッドヒートを繰り広げていました。それに合わせて、わたしたちベンチの１年生も応援の声が大きくなり試合が盛り上がっていきました。そして残り３分を切った頃です。パスカットを狙った自校のエースが勢い余って相手校のエースに強くぶつかってしまったのです。自校のエースは無事でしたが、相手エースは床に倒れ足を負傷し、試合続行不能でやむなく退場しました。それを見ていたわたしたちは、不謹慎ですが「よし、これで勝てる！」と思い、お互いにゆるめた顔を見合わせました。

しかし、次の瞬間－「メンバーチェンジ！」－自校の監督が発した言葉に耳を疑いました。なんと自校のファールをおかしたエースもベンチへ引っ込めたのです。「えっ！なんで…。勝てるチャンスなのに…。」

結局、試合は負けてしまいました。しかし、結果のことよりも「なぜ監督はエースを引っ込めたのか。あのとき、交代しなければ勝てたんじゃないのか。」納得できない監督の判断を帰り道ずうっと考えていたのを覚えています。この監督の裁量には賛否両論があるでしょう。時間がかかりましたが、わたしは監督のフェアに戦いたかった思いを自分なりに受け止め、「勝った、負けたとか、正しい、間違いということだけでなく、世の中には今まで知らなかったものの考え方があるんだな。」と、自分の損得よりも優先して行動しなくてはならないことが世の中にはあることを監督から教わったように感じ、心の根っこがちょっぴり伸びたような気がしました。その監督は厳しくて１年生のわたしには近寄りがたい存在でしたがその後、今までよりも親しみを感じると共に、自分たちの監督でよかったと誇りに思うようになりました。

少し専門的になりますが、国語や算数などの正規の教育課程を顕在的（けんざいてき）カリキュラムといいます。これに対して、この監督のように指導者の目に見えない無意識的な言動や行動などから子どもたちに伝わっていく潜在的（せんざいてき）（ヒドゥン）カリキュラムがあります。子どもたちは主に顕在的カリキュラムに従って学習し、学力が身についていきますが、子どもたちの生きる力は潜在的なカリキュラムを通して育まれていくと考えられています。普段何気なく話したり行動したりしている大人の後ろ姿を見て子どもたちは考え方や生き方を学んでいくのですね。（ただし、潜在的カリキュラムは悪い方向にも働くので気をつけなくてはなりません。）

７月２１日から長い夏休みが始まります。子どもたちは地域行事に参加したり、お盆に帰省したりするなど普段とは異なる様々な「ヒト・モノ・コト」に出会うことでしょう。その関わりを通して、多くの子どもたちの「心の根っこ」が伸びていくことを願っています。